



# 学びと成長レポート

Vol. 4

## はじめに

立命館大学では、2016年度より実施している学部生を対象とした「学びと成長調査」を拡張し、2021年度に「学びと成長調査（大学院生版）」を初めて実施しました。

本学では大学院生の学びと成長の実態を把握する上で3種類のデータや資料を用意しています。

1つ目は、大学院・研究科・教員のデータ・資料です。このデータ・資料には、教学の基本骨格をなす人材育成目的と3つのポリシー、カリキュラムの構造を示すカリキュラム・マップ、ツリー、科目概要が含まれ、大学院・研究科・教員として、大学院生の学びと成長を生み出す前提条件が揃っています。

2つ目は、大学院生の学びと成長についての客観データです。個々の科目の試験の素点や成績、GPA、大学院生の成果物を評価した結果、学会発表や論文への投稿などの研究業績、ポートフォリオの記録を評価した結果が含まれます。大学院生自身の主観ではなく、評価者による責任ある評価の結果としてもたらされる客観データです。

3つ目は、大学院生自身が自らの学びと成長について評価した結果としてもたらされる主観データで、授業アンケートや今回ご紹介する「学びと成長調査」のようなアンケート調査の結果、さらには各プログラムの参加者アンケート、インタビュー調査が含まれます。

立命館大学では、これら3種類のデータや資料を組み合わせることで大学院生の学びと成長を立体的に把握することに努めています。

本レポートでは、上記3つ目のデータの中核となる、2021年度に実施した「学びと成長調査（大学院生版）」をもとに、授業・研究活動の満足度や意欲度を博士課程前期課程・修士課程・専門職学位課程（以下、「前期課程」と略す）、博士課程後期課程（以下、「後期課程」と略す）別に俯瞰するとともに、文系／理系の違いや国内／国際学生の比較を行いました。

次いで前期課程と後期課程の研究時間を、文系／理系と国内／国際学生とで比較しました。

最後に、データが十分に揃っている前期課程に焦点を絞って研究指導の有効性を検証するために、研究指導の具体的な種類や内容、成果、時間を問う「学習機会・研究機会」、「学習過程・研究過程」、「学習成果・研究成果」、「研究時間」に関する34項目（問5～8）から得られた6つの因子と、問11と問12から得られた「満足感」と「意欲」の2つの因子に関して構造方程式モデリングにより大学院生の学びと成長をモデル化しました。

以下がその内容です。

## 1. 実施概要

「学びと成長調査（大学院生版）」の質問項目は、すべての研究科・課程に共通する必要最小限の項目のみから構成されており、研究科や課程の違いにかかわらず、大学院生として身につけるべき基本的な素養や研究

遂行能力、心構えについて統一的に確認できるよう作成されています。

項目は、大きく分けて「教育目標の達成度」「学習機会・研究機会」「学習過程・研究課程」「学習成果・研究成果」「満足度・意欲等」の5つで構成されています。学部生版と同じ項目を用いることで内部進学者を縦断的に調査できるようにしています。また、大学院生の実態を網羅的に把握できるように、国際的な研究への参加や修了後のキャリアの志向性なども項目に加えています。さらに独自設問を設けている研究科もあります。

実施は、全研究科の全大学院生に対し、2022年1月～2月末（研究科により、開始・終了日が異なる）に実施しました。方法はWeb（manaba+R）にて実施し、「研究科院生のページ」や対象者が受講している授業のコースの「アンケート」機能を利用しました。

回収数は前期課程で916名（全院生の31.5%）、後期課程で141名（全院生の19.2%）でした。残念ながら後期課程については、研究科によっては回答者が1、2名というところもあり、十分なサンプルを得られなかったため今回の中心となる構造方程式モデリングからは除外しました。

## 2. 特徴的な結果について

### (1) 授業・研究活動の満足度

大学院での授業、研究に対しては、下記のとおり非常に高い満足度になっています。学部生の授業に対する満足度（2回生：79.9%、3回生：76.5%、4回生：86.2%、卒業予定者：87.5%）と比較しても高い結果となっています。授業での学び、研究活動ともに、前期課程よりも後期課程の方が若干高くなっています。

文系／理系別に見ると、授業での学びについては文系が高く、逆に研究活動は理系が高くなっています。また、国内／国際学生の比較では、両結果とも国際学生の方が高い結果となりました。

なお、前期課程の回収数は文系481名、理系435名で、後期課程では文系94名、理系47名でした。

また、国内学生の回収数は、前期課程538名、後期課程81名で、国際学生は前期課程378名、後期課程で60名でした。

〈肯定的回答比率（満足度）〉

「満足していない」－「あまり満足していない」－「やや満足している」－「満足している」の4択から「やや満足している」「満足している」と回答した比率

#### ①問 11\_01 立命館大学大学院における授業での学び

前期課程全体：89.7%

うち文系：91.5%、理系：87.8%、国内学生：87.5%、国際学生：92.9%

後期課程全体：92.2%

うち文系：93.6%、理系：89.4%、国内学生：90.1%、国際学生：95.0%

#### ②問 11\_02 立命館大学大学院における研究活動

前期課程全体：90.2%

うち文系：89.0%、理系：91.5%、国内学生：88.5%、国際学生：92.6%

後期課程全体：92.9%

うち文系：90.4%、理系：97.9%、国内学生：90.1%、国際学生：96.7%

### (2) 授業、研究活動への意欲度

満足度よりもさらに高い数字になっており、学部生（2回生：88.1%、3回生：86.7%、4回生：89.0%、卒業予定者：87.1%）と比較しても高い結果となりました。こちらも授業での学び、研究活動ともに後期課程の方が前期課程よりも若干高くなりました。

文系／理系で見ると、授業での学び、研究活動への意欲度はともに、前期課程、後期課程の双方において文系が理系よりも高くなっています。また、国内／国際学生別に見ると、授業での学び、研究活動への意欲度はともに、前期課程、後期課程の双方において国際学生が国内学生を上回っています。

〈肯定的回答比率（満足度）〉

「意欲がない」－「あまり意欲がない」－「やや意欲がある」－「意欲がある」の4択から「やや意欲がある」「意欲がある」と回答した比率

①問 12\_01 立命館大学大学院における授業での学び

前期課程全体：92.9%

うち文系：96.9%、理系：88.5%、国内学生：91.1%、国際学生：95.5%

後期課程全体：94.3%

うち文系：98.9%、理系：85.1%、国内学生：91.4%、国際学生：98.3%

②問 12\_02 立命館大学大学院における自身の研究活動

前期課程全体：95.7%

うち文系：96.3%、理系：95.2%、国内学生：95.2%、国際学生：96.6%

後期課程全体：97.9%

うち文系：98.9%、理系：95.7%、国内学生：97.5%、国際学生：98.3%

(3) 週当たりの研究時間 (図 1)

前期課程全体で見ると、ボリュームゾーンが6～11時間未満(17.4%)と26時間以上(23.6%)の2つの時間帯に分かれています。文系/理系で分けて見ると、文系のボリュームゾーンは6～11時間未満(21.1%)であり、理系のボリュームゾーンが26時間以上(37.8%)であることから、全体で見られた2つの時間帯は文系と理系のボリュームゾーンだということが分かります。

また、国内学生と国際学生を比較すると、国内学生はボリュームゾーンが6～11時間未満(14.4%)と26時間以上(30.7%)に分かれますが、国際学生は6～11時間未満(21.5%)、3～6時間未満(17.8%)、11～16時間未満(15.1%)と3～16時間未満に過半数が集まっていることが分かります。

次に後期課程を見ると、ボリュームゾーンが前期課程よりも時間数が多い方向にシフトし、26時間以上に41.1%が集中し、次いで11～16時間未満に12.8%が集まっていることが分かりました。

研究時間 (1週間あたり)	前期課程					後期課程 全体
	全体	うち文系	うち理系	うち国内学生	うち国際学生	
0時間	1.2%	2.2%	0.0%	1.5%	0.8%	1.4%
1時間未満	2.0%	3.4%	0.2%	2.1%	1.9%	2.8%
1～3時間未満	8.1%	12.8%	2.7%	8.6%	7.4%	7.1%
3～6時間未満	13.3%	19.5%	6.4%	10.1%	17.8%	6.4%
6～11時間未満	17.4%	21.1%	13.2%	14.4%	21.5%	9.9%
11～16時間未満	13.3%	12.4%	14.6%	12.0%	15.1%	12.8%
16～21時間未満	12.2%	11.0%	13.4%	11.8%	12.7%	6.4%
21～26時間未満	9.0%	6.7%	11.6%	8.8%	9.3%	12.1%
26時間以上	23.6%	11.0%	37.8%	30.7%	13.5%	41.1%

図 1 前期課程および後期課程の大学院生の1週間当たりの研究時間

(4) 前期課程の学びの成長モデルについて

はじめに、十分なサンプル数が確保できた前期課程の大学院生 847 名に焦点を当てて、主に研究指導の具体的な種類や内容、成果、時間を問う「学びの経験」(学習機会・研究機会：問 8、学習過程・研究過程：問 6、学習成果・研究成果：問 5、研究時間：問 7)に関する 34 項目(問 5～8)について、質問項目の構造を特定するために最尤法プロマックス回転による因子分析を行い、固有値 1 以上の因子を採用しました。なお、全ての項目を採用するために単純構造は求めませんでした。

分析の結果、6 因子が同定されました。第 1 因子は問 5 の 10 項目が負荷したことから「成長実感」、第 2 因子は問 8 の 8 項目(1-8)が負荷したことから「学習機会・経験」、第 3 因子は問 6 の 6 項目(1,5,6,7,10,11)と問 7 の 2 項目(2,3)が負荷したことから「主体的な学び」、第 4 因子は問 6 の 3 項目(4,8,9)が負荷したことから「共同的な学び」、第 5 因子は問 6 の 2 項目(2,3)が負荷したことから「集団討議行動」、第 6 因子は問 8

の3項目(9-11)が負荷したことから「学会参加経験」としました。

これらをまとめると、研究指導の具体的な種類や内容、成果、時間に関する「学習機会・研究機会」、「学習過程・研究過程」、「学習成果・研究成果」、「研究時間」の問いは、「学びの経験」とも呼べる以下の6因子から構成されます。

「成長実感」 (Q5)	研究遂行に必要なスキルを習得したという実感 (学習成果・研究成果の項目群)
「学習機会・経験」 (Q8の大半)	研究遂行に必要なスキルの指導を受けたという経験 (学習機会・研究機会の項目群)
「主体的な学び」 (Q6の半数とQ7)	自ら積極的に学習に取り組む姿勢 (主に学習過程・研究過程、研究時間の項目群)
「共同的な学び」 (Q6の一部)	他の学生と一緒に学ぼうとする姿勢
「集団討議行動」 (Q6の一部)	ペアやグループ活動で積極的に意見交換する姿勢
「学会参加経験」 (Q8の一部)	学会や研究会に参加した頻度

つぎに、心理的な変数である「学びの充実感」に関する項目については、「満足感」の2項目(問11)と「意欲」の5項目(問12)について、それぞれ最尤法プロマックス回転による因子分析を行いました。その結果、どちらも1因子性が確認されました(「満足感」 $\omega = .742$ ; 「意欲」 $\omega = .807$ )。

さいごに、「学びの経験」と「学びの充実感」に関する8因子を用い、図2に示す前期課程の大学院生の「学びと成長のモデル」を構造方程式モデリングにより求めました。

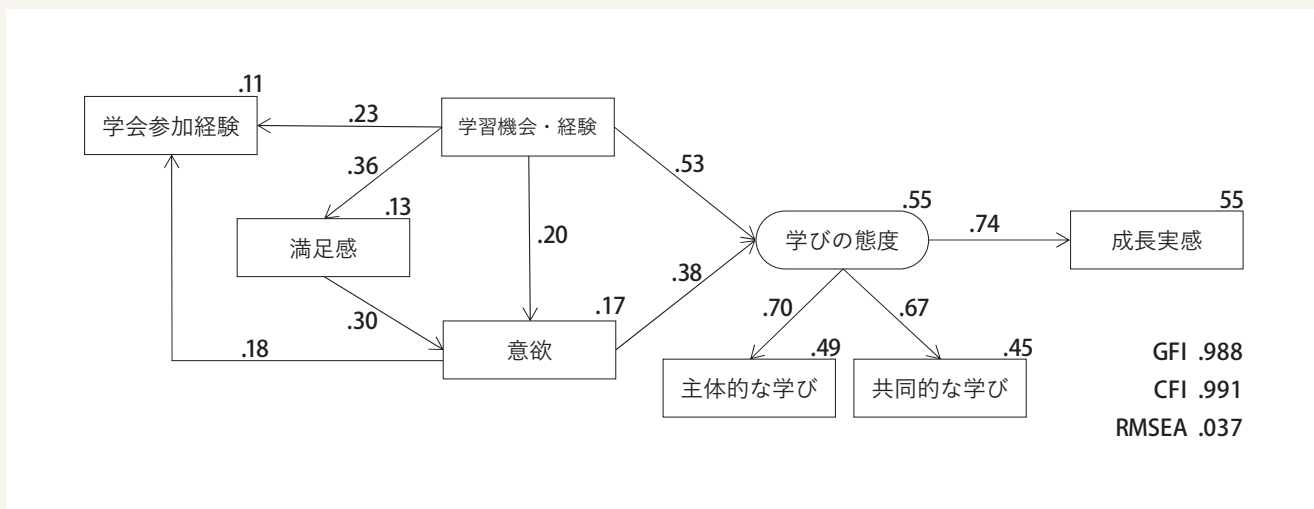


図2 前期課程の学びと成長モデル

### 3. まとめにかえて

はじめに、今回の「学びと成長調査(大学院生版)」からは、本学の大学院生が授業や研究に関して学部生よりも高い満足度と意欲度を抱いていることが明らかとなりました。なかでも文系/理系で見ると、授業の満足度は文系が高く、逆に研究の満足度は理系が高くなっています。また、前期課程と後期課程を比較すると、授業、研究ともに後期課程の方が満足度が高いようです。さらに国内/国際学生の比較では、授業、研究とも

に国際学生の方が高い満足度を示す結果となりました。

つぎに、研究時間からは、文系と理系の研究時間の違いがもっとも大きな差として表れ、理系の研究時間は26時間以上がもっとも多く、文系は6～11時間未満がもっとも多くなりました。国内学生と国際学生の比較では、国内学生が26時間以上の層、次いで6～11時間未満の層が多いのに対して、国際学生は3～16時間未満の層に過半数が集まっていました。後期課程はボリュームゾーンが前期課程よりも時間数が多い方向にシフトし、26時間以上に41.1%が集中しました。

なお、(3)で示した研究時間に関しては、あまり因子負荷量は大きくありませんが「主体的な学び」に含まれています。

さらに前期課程の統計的な分析からは、「学びの経験」と「学びの充実感」に関する項目から8つの因子が同定され、それらの間に図2のパス図に示した関係性が確認されました。ここから、因子負荷量等を勘案すると、

- ①「研究に必要な方法論やテクニックを学ぶ授業」や「実社会と研究内容との関連を考える機会がある授業」、「自分の成長を振り返る機会がある授業」、さらに「異なる専門領域の学生と意見交換する授業」など研究に関するさまざまな学習機会・経験を積むことで満足感や意欲が向上し、国内外の学会への参加も促される。
- ②学びに満足しているほど、学びに対して意欲的になる。
- ③自身の学びの意欲の向上と学習機会・経験を積むことで、主体的かつ共同的に学ぼうとするポジティブな態度が形成される。
- ④ポジティブな学びの態度を持つことで、「リサーチ・スキルとテクニック」や「研究マネジメント力・情報収集力」、「表現力・論述力・コミュニケーション力」や「研究環境への理解」等、研究に必要な多様なスキルが習得され、それが成長実感となる。

という前期課程の大学院生の学びと成長の過程が見えてきそうです。すなわち、大学院生は学びに対し意欲的かつポジティブな態度で取り組み、大学教員はそれらの形成を促すような研究指導が求められるということです。

終わりに、立命館大学・大学院では、2022年度以降も「学びと成長調査（大学院生版）」を実施していく予定です。次年度以降は、過去のデータとの比較も可能となり、今後の大学院特有の学びや成長の様子を明らかにすることで、研究科の教学改善につなげていきたいと考えています。

大学院生のみなさん、調査へのご回答、よろしくお願いいたします。